



1985夏の奇跡



関まさゆき著

午後一時を過ぎ、深緑の山中を突き抜ける国道に夏の温かい雨が降ってきた。海が近いのか、潮の香が自転車のペダルをこぐ度に強くなる。なだらかな坂の上にバス停が見えた。「あのバス停で雨宿りだ」と独り言をいった。

バス停までくると、遠くに海が見えた。自転車を立てかけて、古びた小さな待合室に入った。錆びついたキンチョウのハウロウ看板が壁に掛っているのが見えた。それに白いペンキが剥げかけた木製のベンチが三つあった。私は、そこに寝袋とリュックを下ろした。「ここは25年前と全く変わっていない」と不思議な気持ちを言葉にしてみた。

ベンチに腰掛けて、私は遠くの海をみた。私は40歳で、夏休みを利用して自転車旅行にでている。自転車の旅など本当に久しぶりだ。初日の8月11日、信州の田舎町から太平洋を目指して出発した。そして、今日は2日目、とうとう、海まであと数キロのところまで来た。旅の工程は片道約200キロ。

なぜ、40男が、そんな旅に出たかという、一五歳の時に、8月11日から出発した自転車旅行と同じ工程、同じ日付でやりたかったのだ。15歳の感受性豊かだった時の感覚を呼び覚ますことで、自分が変わるような気がした。

私は不動産の投資会社を経営している。大学を出て、最初に勤めた会社を一年でやめた。その1年でサラリーマンに向いていないのが嫌だというほど分かった。その後、職を転々としが、自分にはセールスが向いているのが分かった。自営で保険のセールスを始めると、面白いように売れた。収入は増えても倹約して、金を貯めた。その金を使って会社を起し、不動産を次々と買った。その家賃収入や転売益で収入を得ているほか、中古車センターなどいろいろと商売の手を広げていた。会社はうまくいっている。二〇代の半ば、職を転々としていた時は辛かったが、そのほかは大きな波乱もなく、これまでやってくることができた。問題といえば、この年になっても、まだ独身ということ。

この頃、不機嫌になることが多い。自分の会社のスタッフを怒鳴ったり、運転中に割り込んでくる自動車に散々にクラクションをなり散らしたり、ガソリンスタンドの対応の悪いアルバイトを叱ったり……。我ながら嫌なオヤジになっていると思う。

23歳の時、最初に勤めた会社に40歳の嫌な上司がいた。いつも、不機嫌で、よく人を怒鳴る。一生懸命に仕事をして、できる男だが、皆から嫌われていた。

「自分だけが、この世で正しくて、周りの人間は、道具のように思っている。自分には感情があって、周囲の人間には感情がないと思っている。ああいう男が、この世の中を住みにくくさせている。自分に問題が無いと思っている人間ほど、たちが悪い。ああには、絶対、なりたくない。このままここに居たら、ああいう下らない大人になる」と、思って会社を辞めた。

ところが、最近、あの頃の上司と自分が似始めているのに気づいた。その当時、サラリーマンを続けると、あんな人間になってしまうと思っていたが、そうではないことに気づいた。成功体験という小さな箱を作って、その中に入り込んで、周りが見えなくなってくると、そうなると分かった。そんな自分を変えなくなった。小さな箱から出たくなった。

そのためのきっかけづくりに、この自転車の旅に出たのだ。15歳の自分には、まだ、そんな小さな箱があることすら知らない。旅の目的である15歳の旅の追想には、このルートはもってこいだった。なぜなら、道筋の光景があまり変わっていないのだ。コンビニがちょっと増えたぐらいだけで。山梨県の韮崎から静岡県興津に抜けるこの国道52号線は、25年の間、時代から取り残されているかのようなようだった。

そのためか15歳の時に味わった同じ情景が目飛び込み、同じ感情が、胸に込み上げてきた。

夕日に照らされたお地蔵さん。

朽ちかけた漆喰の壁。

農家の軒に揺れる盆提灯。

夕立を運ぶ入道雲。

深い渓谷にかかる虹。

そんな情景に美しさを感じながら、自転車をこいだ。

この古びたバス停も25 年前、海を目前に雨が降ってきて休んだ場所だった。何もかも二五年前とそっくりだ。そんな事を考えていると、慣れないことをやっているせいか仕切りと眠くなってきた。そして、寝袋を枕にベンチに横になると、眠りに落ちてしまった。

2 . 1985 年の自分

小半時ほど経ったとき、目が覚めた。まだ、雨が降っていた。そこに、高校生ぐらいの少年が自転車で坂を上ってきた。洗いざらしのフルーゼンズを膝までまくり上げ、無地の白いTシャツを着て、サスペンダーをしている。頭にはカンカン帽をかぶっている。少年の乗っている自転車は青いツーリング用のドロップハンドル。ちなみに、私が乗っているのはマウンテン・バイク。とにかく少年から古めかしい印象を受けた。

そして、私と同じようにバス停で雨宿りのために入ってきた。私は体を起こしベンチに座りなおした。

少年は礼儀正しく、カンカン帽をとって「こんにちは」と声をかけてきた。私は寝ぼけ眼で、「こんにちは」と返事をして、陽に焼けた少年の顔を見るとびっくりした。私の少年時代とよく似ていたからだ。さらに驚くことに、外に置いてある自転車は、私が高校の時に乗っていた自転車と同じだ。まだ、夢を見ているかと思ったが、意識はもうしっかりしているので、現実らしい。よくある映画やドラマの展開に似ていると思った。

少年は、「いつまで続きますかね、この雨」と、人懐っこそうに話かけてきた。

こういう時は、私は自分が置かれている状況を確認めたくなる心理が働いた。

ようするに、自分は過去にタイムスリップして、過去の自分と対面しているのか、だとしたら、何年の何月何日に。そこで、質問をした。

「君はどこから来たの？」

「長野県の長野の諏訪からです」

やはりという答えが返ってきた。

「遠いところから、すごいね。まだ、結構若いようだけど、高校生？」

「そうです。高校一年生です」

「私も諏訪地方の高校のことは詳しくてね。もしかして、通っている高校って、県立の岡谷南高校じゃない？」

「え、どうして分かったんですか？」と、驚いている。

私が、タイムスリップしたとう状況は、質問をするたびに現実性を帯びていく。

「変な質問をするようで、悪いのだけど、寝ぼけていてね。今日って、何年何月の何日？」

「ぼくも、よくそういうことありますよ。今日が何曜日か分からないようなこと」と、相手の感情を気遣うようにいった。

内心、「さすがオレ、若いながら、接客の基本ができている。オレは、この如才なさで、会社を一代で築きあげたんだ」と、妙に嬉しくなった。

「で、今日はですね。60年8月12日の月曜です」

「60年って、西暦じゃないよね」

「昭和ですよ。昭和」

「やはり」と、私は、この返答を受けるのが怖かった。本当にタイムスリップしてしまったことが分かったからだ。

私は、これまでに仕事上で、様々な衝撃的な事実遭遇してきた。そして、そのたびに自分を訓練してきた。最初の衝撃期は、取り乱してはならない。じっと耐えること。そのうち、潜在意識が自動的に状況を受け入れてくれる。次の段階では、新しい状況の利点を探し始める。私は、これまでのビジネスでこのプロセスをいやというほど経験してきた。今回のケースも同じことだ。できるだけ短期間で、このプロセス

を経た。

そして、目の前にいる二五年前の自分に出会えたことに喜びを感じはじめた。しかし、一五歳の自分に、ここで起こっている衝撃的な事実を伝える意味があるのかを考えはじめた。が、とりあえず、伏せることにした。しかし、伝えておきたいことがあった。

「君は、どうして、一人でこんな旅にでたんだい」

「いや、ちょっとですね」

「彼女にふられたとか、そんなところじゃないかい。ふられたショックで居ても立ってもいられなくなって」

「え、どうして分かるんですか？さっきもぼくの高校を当てたし。あなたの職業は占い師じゃないですか？」

「それもやっているかな」

事実、私は時々、占いの仕事もしている。

「その彼女って、かわいい子だろ？」

「まあ、そうです」

「君は結構、傷ついている。本当の心の中は、どん底だ。この空ように」

「その通りですよ」

「しかし、占い師と言えるのは、その娘は早く忘れた方がいい」

一五歳の私は、私をキッと睨んで、唇をかんだ。私は続けた。

「いや、若いうちはね、女の子の容姿にだまされているだよ。その娘は、無口だったじゃないか？」

「まあ、そうです」

「一緒にいると疲れる？」

「あなたすごいですね。どうしてそこまで分かるんですか」

「その娘は、物静かにみえる。しかし、それは誤解だ。偏屈な変わり者だよ。その娘は、一人が好きなんだ。一生、孤独に暮らす女だ。君は若すぎて、しかも恋をしているから、彼女の本質が分からないだ。その娘と一緒になれたとしても、つまらないだけだぜ。早く忘れることだ。そんな女を思って人生を台無しにしてはダメだ」

「なんだか、上から目線ですね。もし、それが、全部、本当だとしても、人の心はコントロールできるものじゃありませんよ。失恋して、寂しいものは寂しい」

「気に障ったら、あやまるよ。確かに、そういうものは、時間が解決してくれる。ただ、自分のことのような気がして、どうしても言いたかったんだ」

そうこう言っているうちに空が晴れ出した。

「君、腹へってない？」と私は尋ねた。

この国道52号線には、店らしき物がなく、私は昼飯を食べていなかった。

「実は、ぼく、昼飯まだなんです」

「この坂を下って、海に着いたあたりにドライブインがある。カツドンでもおごるよ」

私たちは、海に向かった。

実際、15歳の時、そのドライブインで遅い昼食をとった。その時のカツドンがうまかったこと。それを思い出した。

3．運命は定められている？

ドライブインの窓から、海が見える。店内の壁には、サントリーの『ペンギンズ・バー』のポスターがはってあった。そして、ラジオからは、『ウイ・アー・ザ・ワールド』が流れていた。

私を占い師だと思っている一五歳の私は質問をいくつもしてきた。

「ぼく、今、ミュージシャンになりたいと思っています。なれるでしょうか？今、かかっているこないいい曲をたくさんつくって、人を感動させたいんです。ぼくは、『ウイ・アー・ザ・ワールド』に参加している人、皆の名前を言えますよ。ライオネル・リッチー、マイケル・ジャクソン、ディオンヌ・ワービック、ビリー・ジョエル、スティービー・ワンダー、ブルース・スプリングスティーン・・・」

一五歳の私は、目を輝かせて早口で言う。この頃、私は「世界に何かを表現したい。人を感動させたい」という強烈な欲求を持っていたことを思い出した。行動の原動力は、そこにあった。勉強はそっちのけで、ピアノの練習や作曲を一日五時間もしていた。

今の自分の考え方、行動の仕方とは随分違っていることに驚く。今の自分は、「いかに効率的に動き、利益を生み出すか」にある。もう一度、そんな感受性で生きることができたらなと思う。

「随分、詳しいね。けど、君がミュージシャンになるかは、それは分からないな。ただ、言えることは、マイケル・ジャクソンは、そんなに長くは生きないよ」

「さっきは、あれだけ、ズバズバとぼくのことを当てたじゃないですか。料金を払わないと、ぼくの未来のことは教えてくれないのですか」

「いや、そういう訳じゃない。あまりに先のことが分かってしまうと、つまらないじゃないか。私の占いは本当に当たるんだ。言ってしまうと、君の人生を台無しにしてしまいかねない。マイケル・ジャクソンのことは、君の人生とはあまり関係がないから、言っても害はないからね」

「でも、ぼくが何に向いているくらい教えてほしいな」

「それも、これから探すんだ。色々失敗してな。そんなもの、簡単に分かったら、面白くないじゃないか。だいたい、人生ってものは、筋書きが分かったら、面白くないんだ」

「占い師さん、運命ってあるんですかね」

「私もこの7, 8年、あると思うようになったよ。人は、生まれる前に、ある程度の筋書きを書いて生まれる。生まれた瞬間、オギャーと泣いて、筋書きを忘れる。けれど、だいたい、筋書き通りに事が進んでいく。けれど、出来事に対して、どう感じるか、どう考えるかは、決められていない。私が考えるには、いい人生かどうかというの、どんな事実があったとか、どんな物をもったかで決まるんじゃなくて、感じ方、考え方に左右されるとね」

「占い師さんは、どうして、運命があると思うんですか」

「私は今、40歳で、占い師のほかに会社もやっている」

「へえ、社長さんなの」

「小さな会社だけど、うまくいっているよ。何事もうまくいっている状況を維持しようとする、心配が多くなるよ。会社なんかやっているとね、いろいろ、予想もできないことが起こるのさ。ある時、自分が恐れることがたくさんあったから、心が恐怖で一杯になった。けど、運命ってものを信じるようになって、その恐怖が消えたよ」

「どうしてですか」

「運命を自分で作ってこの世に生まれたなら、自分に手に負えないことは決して起こらないはずだよ。自分にとって必要なことしか起こらない。そう信じてしまえば、楽さ。安心して眠れる」

ぼくは、怖さゆえにそうやって小さな箱の中に入ったのかもしれない。

「そこは、ぼくの考えと違うな。ぼくは運命なんてないと思っているんです。こうして、いきながら、創造しているって感じですかね。だから、この先、何があるか分からない」

「どっちみち、私たち人間には、その答えは分からないよ」

と、いいながら、私は水平線をみた。すると、遠くで、飛行機が太平洋の向こうに消えていくのが見えた。

4．大事件があった日

その時、あることに気づいた。

「君、今日の日付をもう一度教えてくれないか」

「1985年8月12日です」

店内の時計を見た。午後4時。

「この日は、日航機の墜落事件があった日だ。後3時間で、大変なことになる」

私は、15歳の私の目を見て言った。

「日航機墜落事件？なんですか、それ」

「今日の夜七時に、起こる。そこで、520人の命が犠牲になる。それは、日本の航空機事故で最悪の事故になる」

「本当ですか？あなたは、そんなことまで占えるのですか？」

「これは、占いではないんだ。未来の事実だ」

「未来の事実？それがもし、本当なら何とかしなくちゃ」

「何とかする？」

私には、その発想が新鮮だった。

「ええ、当然でしょ。そんなにたくさんの人が死ぬと分かっている、指をくわえている訳にはいきませんよ」

この発想は、小さな箱に入っていない人の発想だと思った。小さな箱に入っている人は自分以外の人は感情がないと自然に思ってしまう。けれど、箱の中に入っていない人は、自分もその他の人も、皆、同じ感情のある人だと自然に感じている。

「気持ちは分かるよ。しかしね、運命は変わらないよ。さっき言った通り、それが私の経験からきた結論だよ」

「ぼくは、さっきも言った通り、運命について、そうは考えません。試してみる価値はありませんか？」

「試すって、日航機の墜落を止めるってことかい？」

「ええ、そうです」

私の中にも、やる気というか人としての使命感のようなものが沸いてきた。

「やるだけのことはやってみるか。とにかく、ここを出よう」

そう言って、二人はレジにいった。そして、私は支払いをしようとして、財布を開けると2010年の通貨しかないことが分かった。

「もう一度、テーブルに戻ろう。確かめたいことがあるんだ」

そうして二人でテーブルに戻り、私は財布を覗き込んで、使えそうな金を選別した。

紙幣はすべて使えない。昭和60年以前の硬貨をテーブルに置いた。10円玉5枚と100円玉3枚しかない。私は、この世界では無一文であることを痛感した。そこで、一五歳の私に金を借りることにした。これから、自分のやろうとしている日航機墜落の阻止のためにも多少の金はある。そのためなら、私が未来から来たことを告白してもいいと思った。

「君に相談があるのだが、お金を貸してくれないか。小銭でいいんだ」

「あなたは、本当は、そういう人だったんですか。こうやって、人にたかっては生活している」

私はむっとした。しかし、ここで議論をして時間を無駄にしたくなかった。

「いや、お金はあるんだ」

私は、財布から1万円札や5千円札、千円札を出した。2000年から出回っている改定500円硬貨も出した。さらに平成の刻印がある100円や10円の硬貨も。

「これは未来のお金だ」

一五歳の私は、驚いて返答に窮しているようだった。

「とにかく、この金を手に取ってみてほしい」

一五歳の私は、まず、紙幣の透かしを確認した。

「聖徳太子でなく、福沢諭吉ですね。それに、この女の人知らないな。千円は夏目漱石。それに、この『平成』ってなんですか」

「よく気づいたね。今から、3年後に昭和天皇がなくなられて、平成という年号になる。私は、平成22年からやってきた」

「ということは、25年後には、タイムマーンができているということですか」

「そうだ」

信じてもらうために、そういうことにしておいた。

「へえ、こりゃ、すげえ！飛行機の墜落のことも、本当だって、分かりましたよ」

「ありがとう。信じてくれて」

5．作戦開始

私は、ここで15歳の私の力を借りることにした。日航機墜落阻止のために。

まず、テーブルナプキンに、私の記憶に残る日航機墜落に関する情報を書き出すことにした。

- 羽田空港を18時に大阪に出発。
 - この便名は123便。
 - 駿河湾上空で垂直尾翼の一部が吹き飛ぶ。
 - 機長は羽田へ引き返すことを決断。
 - 駿河湾上空を時計回りに旋回。
 - 静岡県から、山梨、東京、埼玉を通過して、群馬県の山中で墜落。
- さらに、フリーハンドの日本地図と、日航機123便の航路をかいた。

「夕方6時半に、この上空を飛ぶ」

私は空を指指した。

「今日夕方6時半、君は日航機を見ることになっている」

25年前の私は、砂浜でテントを張り、その脇にしゃがみこみ、暗くなっていく水平線を眺めていた。そして、自分の頭の真上をジェット機が通過したのを見た。6時30分ごろ。その時は、そのジェット機が墜落するとは思わなかった。

「その後、日航機はエンジンがダメになり、群馬県の山中に墜落した。どうしたら、この事故を防げと思う？」

私は、問いかけてみた。

「まずは、運行を中止させることかな。電話して、その飛行機には問題があります。運行をやめてくださいとね」

「まずは、それをやってみるか」

と、私は、携帯電話を取り出した。そして、インターネット機能で、電話番号を検索しようとした。

「だめか！」

携帯電話の画面には、「圏外」の表示が出ていた。いつもの癖が出た。

「それ、何ですか？」

「携帯電話だよ。これから、10年もすると、皆が、小型電話をもつようになるよ」

「そりゃ、すごえな」

「でもな、このせいで、皆が忙しくなるよ。このお陰で、この機械に皆が追い立てられているかのようだ」

私は、忌々しげに携帯電話を見つめながらいった。

「それに、インターネットという機能がコンピューターで使えるようになって、世界中のあらゆる情報を検索できるようになる。それはともかく、今の技術では」

「公衆電話ですよ」

15歳の私は、海辺にポツンと立つ電話ボックスを指差した。

「そして、104番で、羽田空港の電話番号を調べましょう」と、先読みするので、15歳の私を頼もしくなった。時計を見ると、16時30分。羽田出発まで、2時間半。

6．公衆電話

「君、100円玉を何枚か貸してほしいな」というと、15歳の私は、テレホンカードを出してきた。

「うあ、なつかしい」

そこには、小泉今日子の水着の写真が印刷されていた。そんな懐かしさも自制して、緑色の電話機にカードを差し込んだ。そして、電話番号を調べた。

羽田空港の日本航空のオフィスに電話がつながった。最初は、女性が出たが、できるだけ権限のある人を呼んで欲しいと頼んだ。

すると、30代前半ぐらいの男の声がした。

「もしもし、ご用件を私が承ります」

「18時羽田発123便は、今日、運行の予定がありますか」

「はい。おっしゃる通りです」

「実は、その機体には不具合があります。いきなりこんなことを言っても、不信に思われるのも当然だとは思いますが」と、私はできるだけ丁寧に言った。

「何を根拠に、そのようなことをおっしゃるのでしょうか。私ども、専門の整備師が常時点検をして、万全の安全をきしていますが」

「根拠といっても、今、示すことはできませんが、航行中に垂直尾翼が吹き飛ぶ可能性があります。ですので、今日の運行は停止した方がいいのです」

「失礼ですが、あなた様は、私どもの飛行機を実際に見て、そのようなことをおっしゃっているのですか」

「いや、そうではありませんが・・・」

「なら、航空技術に詳しい専門家でもなさっているのですか」

「そういう立場でもありません」

言葉に詰まった。

「私は占いや予言を職業にしております、私の予言はよく当たるのです。本当に怖いくらい」

「予言？」

「123便は、18時半に羽田空港を出て、駿河湾沖で垂直尾翼が損傷して、羽田に引き返そうとします。そして、エンジンも停止して、群馬県の御巣鷹山に墜落します。そして、520人の命が天に召されます。これは、未来に起こった事実です」

私は喋りながら呼吸が上がっていることが分かった。

「お話は分かりました。この件を上司に相談してみます。お電話番号を教えてくださいませんか」

向こうは、冷静に言ってきた。

「090・・・」と言いかけ、携帯電話の番号を教えそうになった。そこで、公衆電話の電話番号を教えた。

「失礼とは思いますが、このような業務妨害とも判断され、ご意向には添えぬことともございますが、ご了承ください」

私は、自分の無力感を感じた。

「しかし、あなたのお名前を教えてください」と、私はたずねた。

「佐々木と申します」

「佐々木さん、もし、私の忠告に従わなければ、あなたは一生後悔しますよ」と私が言うと、「ご忠告ありがとうございます」と言って、向こうから電話を切った。

私はうな垂れて、テレホンカードを引き抜いた。

6．公衆電話

「君、100 円玉を何枚か貸してほしいな」というと、15 歳の私は、テレフォンカードを出してきた。

「うあ、なつかしい」

そこには、小泉今日子の水着の写真が印刷されていた。そんな懐かしさも自制して、緑色の電話機にカードを差し込んだ。そして、電話番号を調べた。

羽田空港の日本航空のオフィスに電話がつながった。最初は、女性が出たが、できるだけ権限のある人を呼んで欲しいと頼んだ。

すると、30 代前半ぐらいの男の声がした。

「もしもし、ご用件を私が承ります」

「18 時羽田発123 便は、今日、運行の予定がありますか」

「はい。おっしゃる通りです」

「実は、その機体には不具合があります。いきなりこんなことを言っても、不信に思われるのも当然だとは思いますが」と、私はできるだけ丁寧に言った。

「何を根拠に、そのようなことをおっしゃるのでしょうか。私ども、専門の整備師が常時点検をして、万全の安全をきしていますが」

「根拠といっても、今、示すことはできませんが、航行中に垂直尾翼が吹き飛ぶ可能性があります。ですので、今日の運行は停止した方がいいのです」

「失礼ですが、あなた様は、私どもの飛行機を実際に見て、そのようなことをおっしゃっているのですか」

「いや、そうではありませんが・・・」

「なら、航空技術に詳しい専門家でもなさっているのですか」

「そういう立場でもありません」

言葉に詰まった。

「私は占いや予言を職業にしております、私の予言はよく当たるのです。本当に怖いくらい」

「予言？」

「123 便は、18 時半に羽田空港を出て、駿河湾沖で垂直尾翼が損傷して、羽田に引き返そうとします。そして、エンジンも停止して、群馬県の御巣鷹山に墜落します。そして、520 人の命が天に召されます。これは、未来に起こった事実です」

私は喋りながら呼吸が上がっていることが分かった。

「お話は分かりました。この件を上司に相談してみます。お電話番号を教えてくださいませんか」

向こうは、冷静に言ってきた。

「090・・・」と言いかけ、携帯電話の番号を教えそうになった。そこで、公衆電話の電話番号を教えた。

「失礼とは思いますが、このような業務妨害とも判断され、ご意向には添えぬこともございますが、ご了承ください」

私は、自分の無力感を感じた。

「しかし、あなたのお名前を教えてください」と、私はたずねた。

「佐々木と申します」

「佐々木さん、もし、私の忠告に従わなければ、あなたは一生後悔しますよ」と私が言うと、「ご忠告あ

りがとうございます」と言って、向こうから電話を切った。

私はうな垂れて、テレホンカードを引き抜いた。

7．伝言

2人で、堤防に腰掛けた。まだ、明るい、日が傾きかけていた。時刻は5時になろうとしていた。あと日航機123便出発まで2時間。

「頑張りましたね」と、15歳の私は私を慰めてくれた。

「たぶん、あれはカスタマー・サービスセンターの一スタッフだ。あの佐々木という男に何の権限もない」

「失敗ですか？」

「いや、失敗じゃない。失敗は成功のもと、成功のもと」と、気を取り直した。というか、過去の自分に簡単に諦める自分を見せたくなかった。

「しかし、あなたは、さっき、運命はある程度決まって、変えることができない。変えることができるのは、出来事に対する反応だって、言っていましたよね。今、ぼくたちのやろうとしていることは、日航機の乗客の運命を変えることになる。もし、520人が、生まれる前に最初から、『自分のこの生での終りは、日航機123便だ』と決めて生まれてきたのなら、ぼくたちは、その選択を邪魔していることになるのかな」

「確かに、私は運命確定論者だ。さっきまで君は運命不確定論者だったろ。どうして、今になって、さっきまでの私の考えを支持するようになったんだい？」

「あなたは、いいことをしているのに、そして、あなたは何も得することもないのに、疑われて、馬鹿にされて。仮に、うまくいったところで、ぼくたちは誰からもほめられることもない。もしかしたら、この後、警察から取り調べを受けるかもしれない。なんだか、ふと空しくなったんです」

「まあ、大人になって生きるってことは、こんなことばかりさ。けど、決めたことは、最後までやり抜くさ。自分の気持ちを裏切ると、もっと大きな代償を払うことをサンザン経験してきたよ。人を助けたいという気持ちがあれば、とにかくやりぬかなくちゃ」

「代償って？」

「難しい話になるから、やめるよ。俺たちの仕事が終わったらゆっくり話すよ。とにかく、運命確定論と運命不確定論どちらが正しいか、試そうじゃないか。とにかく、今は人生を語っている時間の余裕はない。他にいい手はないかい。一緒に考えてくれ」

「分かりましたよ。これから、羽田に行って、乗客を説得するとか」

「これからじゃ、時間がないな。国鉄・興津駅から乗り継いで、だいたい2時間はかかるだろうな。着いた時には、すべてが後の祭りだ」

「なら、爆破予告をするとか」

「う、その手もあるな。しかし、オレたちつかまるぞ。それでもよければだが」

「それはな」と、15歳の私は、その案を躊躇する様子だった。

「でも520人の命が助かるなら、私は捕まってもかまわないと思う」

「ちょっと待て。その飛行機には、確か、坂本九が乗っていたな」

「あの『上を向いて歩こう』の坂本九？」

「そうだ」

「坂本九に連絡をとりたいな」

「レコード会社を調べ、そこから所属事務所を探して、連絡をとるというのは、どうですか？」

「この時代、携帯がないからな、事務所と連絡がとれても、本人と直接話せるか」

「飛行機に搭乗する前に本人が事務所に連絡する可能性がありますよ。それに、事務所から羽田空港に

連絡をとってもらい、港内放送で呼び出すことだってできる」

「そうか、お前、頭いいな」

一五歳の私は、うれしそうに頭をかいた。

私は、電話ボックスに戻り、104 番でレコード会社を調べ、事務所の電話番号も突き当てた。

「もしもし、私、坂本九さんにお伝えしたいことがあるのです。今、九さんは、羽田空港に向かっていると思いますが、今日、お乗りになる予定の飛行機には、問題があります。搭乗しないほうがいいと言って頂きたいのです。羽田空港に連絡をとって頂き、アナウンスで呼び出し、事務所に電話させてください。九さんの命がかかっているのです」

「飛行機の問題といいますと、あなたは飛行機の関係のお仕事をなされているのですか。もし、そうなら、坂本にいうのではなく、航空会社におっしゃった方がよろしいのではないのでしょうか」

「先ほど、日本航空に電話して、フライトの差し止めをお願いしたのですが、ダメでした」

「なぜですか。日本航空という一流企業が責任をもって整備している飛行機ですよ。日本航空が問題ないといえば、問題ないんじゃないですか」

「おっしゃるとおりです。ここで議論をしても仕方ありません。とにかく、私が言ったことを情報として、お伝え頂ければいいんです。お願いします」

「あなたには、悪意がないことは伝わってきました。坂本のマネージャーに、一応手配をとらせませう。ただ、私は坂本を引き止めることはできません。その飛行機に乗るか、乗らないかは、本人の選択まかせませう」

「それでも、いいんです。ありがとうございます。もし、九さんが、飛行機に乗る選択をしたら、今から私が言うことも伝えてほしいのです。メモして頂ければうれしいです」

「ちょっと待ってくださいね」

電話の向こうの相手がペンと紙を用意しているとき、海に一羽のカモメが着水するのが、見えた。

「あ、そうだ！」と、思わず口にした。いい考えが浮かんだ。日航機を海にできるだけ早く着水させれば、大惨事は防げるかもしれないと。

「お待たせしました。では、ぞうぞう」

「飛行機が飛び立ち、10 分程度で、垂直尾翼が破損します。もし、私の言った通りの事態になったら、九さんは、機長に連絡をとり、すぐに飛行機を海に不時着させるように伝えてください。そうすれば、乗客が全員助かる可能性があります。本来、機長は時計回りに舵をとり、静岡県から陸の上を通過して羽田に戻ろうとします。しかし、その途中でエンジンが停止して、山の中に墜落します。エンジンが停止する前、すなわち、推進力があるうちに、海に着水させる選択が最も安全です。すぐに海に不時着させるのに躊躇するのなら、少なくとも、時計と反対回りに進路をとって、海の上を運行するように努力してください」

「あなたは、事故が過去に起こったかのように言う。すごい想像力ですね」

「信じる、信じないは、あなたの自由です。そして、九さんの自由でもあります。飛行機の乗客を救うためにベストを尽くしているだけです。九さんに伝えて頂ければいいのです」

「私もとにかく全力を尽くしますよ」

「ありがとう。分からないことがあったら、電話をください」

私は、公衆電話の番号を教えた。そして、電話を切った。私の中に、人の命を救えるかも知れないという希望がわいてきた。

「やったね」と、15 歳の私は飛び跳ねていた。私も嬉しかった。考えてみると、この羽田と大阪のフライトを阻止できても、次のフライトでトラブルが発生する可能性が大きい。いっそ、飛ばして、全員の命を救った方がいい。

「いい手を考えましたね」

「2009年に、アメリカであった飛行機トラブルの事を参考にしたんだ。ニューヨークの空港を出発して間もなく、ジェットエンジンに鳥が入りこんだ。その機長は、とっさの判断でハドソン川に飛行機を着水させた。そして、全員無事だった。それはハドソン川の奇跡と呼ばれて、その機長は英雄になった」

「へえ、そんなことがあったんですね」

「今回も、それに持ち込めればいい」

時計を見ると、17時半。出発まであと30分。

「チクチョウ！なんて時間の流れが早いんだ！こうしてはいられない。さっきの佐々木さんに、この手を伝えよう」と言い、私は羽田の日航に電話をして、佐々木さんを呼び出した。

「ああ、先ほどの方ですか。すみません、あなたの情報は確かに123便の運行権限のある上司にお伝えはしましたが、却下されました」

「お伝え頂けたこと、感謝します。ありがとうございます。あと、もう一つお願いがあるのです。もう、離陸はやむを得ないにして、もし、私が言ったとおりの事態になったら、私が言ったとおりに機長に連絡をとってほしいのです。出発して10分もしないうちに垂直尾翼が破損します。その後、エンジンも停止します。もし、機長が時計回りに舵をとり羽田へ引き返す選択をすると、山の中へ墜落します。尾翼のトラブルがおきたら、即、駿河湾に着水してください。そうすれば乗客全員が助かるかもしれません。着水を即断できれば、せめて、時計と反対回りに進路をとり、海の上を飛行し続けてください」

「分かりました。その旨、上司に伝え、指示を仰ぎます」

「ここから、私にできることは、乗客乗員全員の命が救われることを祈るだけです」

「私も、あなたの予言が外れることを祈っていますよ」

これで、二方向から手を打った。

電話を終えると、17時50分。あたりが暗くなりはじめ、遠くに見える伊豆半島に街灯がともりはじめた。遠くに大型船が航行しているのが見えた。

「とにかく、やるだけのことはやった」

「ぼくをあなたの力になれて嬉しいです」

「もし、18時半ごろに、オレたちの頭の上を飛行機が飛び去ったら、失敗だ。日航機は山の中に消える」

「人は運命を変えることできない」

「そうだ」

「もし、頭の上を飛ばなかったから、成功」

「運命は変えられる」

「そうだ」

そして、しばらく沈黙で空を見上げていた。

8 . 水平線の向こう

18 時半。駿河湾の沖に飛行機が現れた。そして、こっちに向かってきた。

「わー、やっぱ運命を変えることはできなかった」

15 歳の私は、頭を抱えた。

「ダメだったか」と、舌打ちをして小声でいった。私は目を下に落とした。

「しかし、オレたち、やるだけのことはやったさ」と、続けた。

頭を抱え、空を見上げていた15 歳の私は、「あ！」と叫んだ。

私も、飛行機が過ぎ去っていった方向をみた。飛行機は、旋回した。群馬県の方でなく、南に進路を変え、太平洋に向かっていった。

「いいぞ！海へ行け」

二人で叫んだ。何回も何回も。

やがて、飛行機は水平線の向こうに消えた。

「多分、駿河湾の南方に着水したに違いない」

「よし、海上保安庁へ電話だ」と、私は飛行機を目撃者として救助要請した。

その後、ラジオをつけて、この事件がニュースとして流れるのを待った。

「ここで、臨時ニュースが入りました。羽田発伊丹空港行きの日航機ボーイング747 型123 便が、今日6 時35 分に、駿河湾沖に不時着した模様。乗客乗員は全員無事が確認されました。現在、海上保安庁が救出作業に当たっています」

「やた！成功したぞ」

私達は、がっちりと握手をした。

ラジオは続けた。

「なお、飛行機のフライト前に、預言者を名乗る男より電話があり、フライトの中止を求めたとのこと」

私たちは、顔を見合わせた。

「それは、ぼくたちのことらしいですね」

「黙っていよう。当然のことをしたまでだから」

「そうですね」

私たちは、近くの酒屋で缶ビールと缶ジュースを買って、砂浜で祝杯をあげた。

「結局、運命は変えることができるんですね。ぼくの勝ちでしたね」

15歳の私は、誇らしげに言った。

「そうだ。今回は私の負けだ。負けでよかったよ」

「さっき、代償っていていたけど、それ、なんですか？」

「そんなこと言ったっけ」

「自分の気持ちを欺くと、代償を払うことになるって、言っていたけど」

「人間、箱に入っちゃうのさ」

「箱って何ですか？」

「ちょっと話は変わるけど、先週、全席自由席の特急電車に乗ることがあった。私は、最初から座っていたから良かったけど、電車の中が段々と混んできた。そこに、中年のサラリーマン風の男が入ってきた。そして、空いている席に座り、なおかつ、隣の席に誰も座らせまいと、カバンを置いた。周囲が自分の敵だと言わんばかりの目をしていた。

その次に、カップルの男女が入ってきた。どうも、2人並んで座れそうもない。その時、ある女性が席を立て、ここに座って、私はこっちの席にいくからと、言った。するとカップルは並んで座れて、その車両の席が全てうまった。さっきの中年男の席を除いて。

この席を譲った女性は、どんな周囲に対して、どんな考えをもっていたと思う？」

「たぶん、車内の皆がいいように考えていたんだと思う」

「なら、中年のオジサンの考えは」

「間違いなく、自分だけがよければいいと思っていた」

「私は、こう思うんだ。女性は周囲の人を自分と同じ、感情を持った人間だと思っていた。それに引き換え、中年のオジサンは、自分が他の人より偉くて、他の人間は自分の物のように考えていたってね」

「箱に入るって、このオジサンのような状態のことを言うんだ。このオジサンは一生懸命に仕事をして、家族も大切にしているかもしれない。けど、自分をごまかしているうちに、人の気持ちも分からなくなって、自分の感受性すら失ってしまう。私は、実は、君に会うまで、そんな大人だったよ。君が、私を箱から出してくれたんだ。ありがとう」

「いや、ぼくは何もしていませんよ。必死になって、できっこないって思っていることを本気になって可能にしようとしているのって、格好いいと思いましたよ」

「そうかい、ありがとう」

「前から聞こうと思っていたんだけど、本当は、あなたは25年後のぼくですか」

「うん、どうかな」

「ちがうにしても、オレ、あなたのような大人ならなってもいいよ」

「そういつてもらえて嬉しいよ」

あたりはすっかり暗くなり、波の音が心地いい。伊豆半島には無数の街灯が輝いている。

10．テレフォン・カード

私は目を覚ました。すると、元のバス停にいた。携帯電話をみると、圏内のアンテナの印が立っている。日付を見ると、平成22年8月12日午後15時。

「妙にリアルな夢だったな」

寝ぼけ眼で、携帯電話のラジオ機能で夕方のニュースを聞いた。

「今日は、日航機墜落から25年。群馬県の慰霊塔には、遺族をはじめとした多くの人が慰霊登山に訪れています。今回は、前原国土交通大臣が慰霊塔に花をたむけました」

「やっぱりな」

私は、それを聞いて海を目指し、自転車を走らせた。あの電話ボックスは無かった。財布を取り出し、近くの自動販売機でペットボトルを買おうとした。財布のカード入れから、ちょっと顔を出しているカードがあった。それを引っ張りだすと、テレフォンカードだった。小泉今日子の水着姿のプリントがしてある。かなり古ぼけていた。(完)